BOOK IX — 自由の代償

第01章 — 大臣の死

01 — 二度目の発表

ハヴェルの死を伝える発表が岡京の公共スクリーンに映し出されてから、まだ二日も経たないうちに、その下に新たな発表が現れた。

今度は写真もなければ、遺族からの声明もなかった。青い政府の紋章と、国家の連続性に関わる事項の管轄権移管について記した六行の文章だけだった。

北部の給水所では、一人の女性が容器に水を満たす手を止め、その文章を読んでいた。後ろに並んでいた男が、また給水制限が始まるのかと尋ねた。

「いいえ。大臣のことよ」

死んだ元大臣のために、なぜ管轄権を変更する必要があるのか。二人には理解できなかった。

ロイには、予定より早く給水所を離れるだけの理由が分かった。夜明けから、通りの向かいに軍の通信車両が停まっていた。乗員は給水の列に近づいておらず、車両にも目に見える武器はなかった。ただ、アンテナだけが異様だった。細長い黒い装置で、車両の動きとは無関係に回転する。

ロイはその前を二度通った。二度ともアンテナは彼の方を向いた。

病院では、レイチェルも同じ発表を読んでいた。三つの端末に、それぞれ異なる版が開かれている。一つ目は一般公開版。二つ目は暫定評議会に届けられたもの。そして三つ目は研究機関に送付された内部の行政通知だった。

「同じ紋章を使っているわ」ロイが入ってくると、彼女は言った。「でも、この三つの通知では、権限を与えられる者も、その権限の内容も一致していない」

レイチェルは三つ目の通知に付け加えられた一段落を示した。回収された寿命延長研究は、直ちに安全保障上の評価を必要とする事項である、と記されている。その文言は、文書と、関連する証拠を身体の内に有している可能性のある人々とを区別していなかった。

「試験を止められるのか？」とロイは尋ねた。

「少なくとも、始めることを難しくはできるでしょうね」

研究室の窓越しに、病院の職員が空のベッドを押して廊下を進むのが見えた。車輪が敷居に一瞬引っかかった。ロイは聞き慣れたその音が消えるまで耳を傾けた。

「人々の方はどうなんだ？」

レイチェルは一般公開版の通知を閉じた。

「それを調べているところよ」

02 — 封印された遺体

ハヴェルの遺体の検査は、北部行政地区の外にある政府の医療施設で行われた。暫定評議会側の裁判所の立会人は、証拠への独立したアクセスを保証する協定に基づいて立ち会った。

彼女は、軍医が負傷箇所を儀礼館で採取された記録と照合する様子を見守った。記録された一連の経過は、激しい戦闘があったことと整合していた。同時に、戦闘をやめる機会を与えられた後もハヴェルが戦い続けたという目撃者の証言とも一致していた。

軍医は、その二つの所見を認めた。

「その結論に署名をした写しをいただきたいのですが」と立会人は言った。

軍医は検査台の脇にある端末を振り返った。新たに表示された指示では、元大臣に関するあらゆる結論は、外部への開示に先立って国防事務局に付議するよう命じられていた。

「私たちがここに入ったときには、その指示は有効ではありませんでした」

「今は有効です」

彼女はその変更を検査記録に残すよう求めた。軍医は異議を唱えることなく従った。まだ明確な義務が一つ残されていることに、安堵しているようにも見えた。

遺体の移送準備が進められている間に、文官が一人やってきた。所属部門を明かさず、名だけを告げた。ハヴェルがどう死んだのかは尋ねなかった。致命傷をもたらした力を再現できるのか、そして証拠に記載された人工の人間には、今もその力を生み出す能力が残っているのか、と尋ねた。

「それは死後の検査で答えられる質問ではありません」と医師は言った。

文官は何かを書き留めた。

「では、もう一方の身体が必要になりますね」

裁判所の立会人はペンを置いた。「もう一方の人物は、死んでいません」

文官は初めて彼女を見た。

「死んでいるとは言っていません」

彼は来訪者名簿に署名することもなく立ち去った。検査が終わると、立会人は自分の記録の認証済みの写しを二部求めた。一部は拒否された。彼女はもう一部を受け取り、何の飾りもない紙の封筒に入れて施設の外へ持ち出した。

元大臣の遺体は、政府の封印の下に残された。

03 — 窓のない委員会

国防事務局のはるか地下では、すでに扉が施錠された状態で会議が始まった。マラ・ヴェン将軍は十二人用のテーブルの上座に座っていた。埋まっている席は七つだけだった。空席は招かれなかった部門のためのものだった。

壁面に、大臣が最後に行った宣言の記録映像が流れた。六年制限についての彼の告白に続いて、医師の報告書と、評議会が新たに定めた研究憲章の概要が映し出された。

映像は彼が死ぬ前の場面で止まった。

「独立した管理下に置かれた証言を撤回することはできません」と法律顧問は言った。「部門の命令一つで憲章を覆すこともできません」

ヴェンは会議に来る途中で、すでに同じ助言を読んでいた。

「覆せと言っているのではない」

隣にいた文官の局長が、閲覧制限のあるファイルを開いた。そこにはロイ・バッティという名前と、記録に残された複数の事件を再構成した資料が収められていた。再構成された記録には空白があり、特に対象についての最初期の観察記録があるはずの箇所が欠けていた。ファイルの末尾には、一つの識別名称があった。NEXUSYS-11。

局長は対象の現在の身体状態を示す医学的な推定値を表示した。右肩はいまだ損傷を抱えている。持続可能な最大出力は、当初の設計値を大幅に下回っていた。もっとも、その推定値自体がすでに数日前のものだった。

「負傷しているのですね」と将校の一人が言った。

「元大臣を殺害したときも、負傷していた」とヴェンは答えた。

局長は次のページを開いた。旧来の連続性計画と、最近回収された寿命延長に関する資料との関係が示されている。図の一部は認証マーカーで覆われ、その場にいる将校たちでさえ開くことができなかった。

「具体的に何を回収しようとしているのですか？」と法律顧問が尋ねた。

「一つの能力です」と局長は答えた。「我々の制御が及ばない能力になる前に」

ヴェンは資料の表示を切った。

「死に関する公開の捜査は継続する。我々の任務はそれとは別だ。対象の所在を確認し、評価したうえで確保しろ。身柄の確保が不可能なら、どう処置するかの判断をこの会議に持ち帰ること。街頭で独断の行動は許さん」

その判断が、また一人の死に関わるものなのかと尋ねる者はいなかった。

04 — 計画ではなく、患者

セナは病室から廊下まで歩くことを許されていた。患者が自動生成されたリハビリの日程を信用しないので、イマニは許可した距離を一枚の紙に書いていた。セナはその距離では足りないと思っていた。イマニはそれを好ましい兆候と受け止めていた。

レイチェルがやってきたとき、二人は残り四メートルについて言い争っていた。

セナが椅子に座るのを待ってから、レイチェルは国防事務局が回収済みの研究資料の目録を要求してきたことを説明した。その要求には、個々の患者を対象とする命令はまだ伴っていなかった。

「それって、私を連れていけるってこと？」とセナが尋ねた。

「受け取る権限のない情報を要求してきた、ということよ」とイマニは答えた。「私たちは渡していないわ」

レイチェルは恐れを目にすると思っていた。しかし彼女が見たのは、診察を受けることは所有権の移転ではないと、あまりにも何度も証明することを求められてきた者の、独特の疲れだった。

「百年計画に志願したら」とセナは尋ねた。「私はその計画の所有物だって、言われることはあるの？」

「ないわ」とレイチェルは答えた。

予定されている研究は非生体材料から始めるのだと、彼女は説明した。百年の生命を可能にする稼働中の装置は存在しない。安全に施せる治療もなく、セナがどれだけ生きられるかの見通しも立っていない。一つの試験への参加が、別の試験への同意と見なされることは決してない。

セナは窓の方を見た。

「じゃあ、本当に決めるべきことができたら、教えてほしい」

レイチェルはそうすると約束した。

その後、彼女とイマニは回収された資料を調べた。ヘリウム3の研究案に記載されていた古い材料規格が、軍の調達部門によって発行されていたことを知り、二人は驚いた。科学報告書その

ものに、その部門の名称は記されていなかった。両者を結びつけるものは、ただ一つの参照番号だった。

小さな発見だった。それは天文台についても、失われた十一年間についても、ロイの身体の起源についても説明するものではなかった。

しかし、百年計画がかつて依存していた機関が、今、その記録を返すよう要求していることを意味していた。

05 — 使わなかった力

午後、ロイは道場に戻った。一般向けの稽古は終わっていた。前の朝に彼が置いた二本の木の棒が、壁に立てかけてあった。

一本を取り、教わった動きを繰り返した。足を定める。左手を動かす。棒はわずかにしなり、それから元の形に戻った。

三度目の動きで、右腕の装具が警告を発した。

ロイは止まった。

その生涯の大半において、止まるということは、彼の身体が最も拒んできたことだった。脅威が問いを最後まで発する前に、その答えを出すよう設計されていた。ハヴェルと護衛たちは、その答えがいかに頼りないものかを彼に教えた。

今度は警告が消えるまで待った。それから、より小さな力でもう一度試した。動きはより滑らかになった。しかし、それはハヴェルが刀身の先に生じさせた、あの異常な衝撃ではなかった。動作をまねることはできても、その内側で起きていたすべてを再現することはできなかった。

道場を出ると、屋根のある通路の向こう端に若い男が立っていた。

身分を示すものの見当たらない灰色のコートを着て、ごく普通の紙コップを手にしている。雨が弱まるのを待っているだけかもしれない。ロイは出入口に移動し、窓に映る像を見た。

ロイの姿がガラスに映るよりも早く、男は顔を向けた。

一瞬、二人の視線が合った。

差し迫った危険は感じなかった。男も距離を詰めようとはしなかった。しかし、その動きには正確さがあった。人間であれ人工の人間であれ、ロイがそれまでに出会ったごく少数の者にしか見られなかった種類の正確さだ。

二人の間を路面電車が通り過ぎた。電車が行ってしまったときには、男は歩き去るところだった。

ロイは屋根の下にとどまった。後は追わなかった。

彼のことを理解できない機械に観察される日々を、何年も過ごしてきた。だが今回の遭遇は、観察している者の方が自分よりはるかに多くのことを理解しているかもしれないという、居心地の悪い可能性を残した。

06 — 資料の保全要求

夕方までに、病院の法務部門には百年計画の資料を現状のまま保全するよう、正式な要求が届いていた。国防事務局に通知することなく、資料を改変、廃棄、移管、あるいは開示してはならないと指示されていた。

保全そのものは妥当だった。問題は付属文書にあった。そこでは、研究対象者と生物学的証拠の潜在的な提供源まで、文書と同じ定義の中に含めようとしていた。

暫定評議会の緊急審議で、レイチェルはその一文を読み上げた。

「この文言は以前にも目にしました」と彼女は言った。「見出しが変わったというだけで承認するべきではありません」

評議会の法務担当者は適用範囲を狭めた命令を求めた。政府の代表者は異議を提出することを約束した。ただし、国防事務局が評議会を正当な管轄機関として認めることまでは約束できなかった。

EDENは双方の立場を記録し、保全要求を公共サービス利用の制限に転換することを拒否した。政府の代表者はその判断にも異議を唱えた。

結論の出ないまま、審議は終了した。

外に出ると、一人の記者が、評議会はレプリカントの寿命問題を解決する治療法を隠そうとしているのかと尋ねた。レイチェルは、治療法は存在しないのだと改めて説明した。別の記者は、ハヴェルを殺害した男は逮捕されるのかと尋ねた。

「彼の死に至った経緯については、今も独立した捜査が続いています」と彼女は答えた。「捜査の中で名前が挙がったからといって、その人が国家の所有物になるわけではありません」

彼女が病院に着く頃には、最初の一文を取り除いたやり取りの編集映像が出回っていた。

ロイは一度だけそれを見た。再生が繰り返される前に音声を切った。

「俺の問題にすり替えるつもりだな」と彼は言った。

「もう、そうしている人もいるわ」

「だったら、俺は病院を出た方がいい」

レイチェルは彼の腕の装具を見た。「どこに行くの？」

いくつかの答えはあった。だが、どこへ行っても、そこにいる他の人々の安全を期待できるような場所ではなかった。

07 — 下の階

国防事務局の別棟にある医療施設では、その朝の演習から戻った将校の回復状態を医師が調べていた。将校は診察台に腰かけ、灰色のコートを畳んで脇に置いていた。

指の関節の一つに、細い切り傷が走っていた。傷はほとんど塞がっていた。

医師は組織の状態を記録し、時間の知覚に異常はなかったかと尋ねた。なかった、という答えだった。次に、記憶の途切れは生じなかったかと尋ねた。再び、なかったという答えが返った。

副官がヴェン将軍の認証を受けた封筒を届けた。

将校は中身を読み、診察台に置いた。

「観察結果は良好だった」と副官は言った。「自ら接触を開始する権限は与えられていない」

「了解しました」

医師は検査記録に署名した。第一ページは通常の軍人に用いられるものと同じ分類を使っていた。最終ページには別個の認証が必要だった。将校がコートを着る間、副官はそのページを覆っていた。

下の階では、人間の陸軍部隊が、再現された市街地での演習に備えていた。部屋の中には、あの将校と同じ徽章を着けた者は一人もいなかった。入口の上のモニターには、日付と『機関間合同評価』の文字だけが表示されていた。

技術者が、二つの集団は合同で訓練をするのかと尋ねた。

「今日は違う」と副官は答えた。

なぜ彼らが同じ建物に集められたのか、誰も説明しなかった。

08 — 最初の包囲網

真夜中を過ぎて、ロイとレイチェルは一緒に病院を出た。雨は弱まり、霧のように空気中に漂っていた。二人は紙のノートや電池、傘を売る小さな店の前で足を止めた。店主はロイの顔を知っていたが、彼の登録番号を尋ねたことは一度もなかった。

出入口からは、北部給水所へ向かう交差点が見えた。

二台の軍用車両がサイレンを鳴らさず通り過ぎた。三台目は、暫定評議会の発足以来、空いたままになっていた政府の敷地に入っていった。上階の窓の奥に明かりがともった。

ロイは最初、旧省庁の建物の周囲に集まっている群衆に関係する部隊の展開かもしれないと考えた。そのとき、レイチェルのもとに裁判所の立会人からメッセージが届いた。検査報告書の写真と、短い警告が添えられていた。

『事務局が要求したのはロイ・バッティの医療記録。大臣のものではない』

レイチェルはそのメッセージをロイに見せた。

彼は再び車両の方を見た。

それまで、追跡とは特定の者たちが特定の一人に向けて集まってくることだった。彼らの動きを把握し、顔を覚え、ときには命令の背後にある理由を知ることもできた。だが、今度は違った。誰も彼を指名手配したと宣言していないうちから、街は彼を取り巻く振る舞いを変え始めていた。

「どこまでが合法なのか、調べる必要があるわね」とレイチェルは言った。

「そのうち、どれだけが合法である必要があるのかもな」

二人は店のひさしの下に立ち、最後の軍用車両が敷地の中に消えていくのを見ていた。店主が外に出てきて、売れ残った傘の陳列台を店内へ運び込んだ。二人に夜の挨拶をすると、明かりを消した。

国防事務局のどこかで、ロイのファイルが文官の机から軍人の机へ移された。末尾の一行は書き換えられていた。

以前の記載は、彼を捜査上の関係人物としていた。

新たな記載には、彼の法的な身分についての言及は一切なかった。

『確保に向けた評価：実施中』

第01章 終。